
金色の星

天泣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色の星

【Nコード】

N5911Z

【作者名】

天泣

【あらすじ】

ナルトが戸籍上女の子で、イタチと恋仲になって、九尾とも和解して・・・忍に恋愛に一生懸命なお話を目指しています。

基本は公式のストーリーを守っていますが、綱手様登場あたりから完全にオリジナルです。

そのためオリジナルキャラもたくさん登場します。

（九尾も公式とはキャラが違います。火の国大名家なども登場しています）

あと、四代目火影が存命しています。

あんまり人が死にません。

平和主義なイタナルコの世界、よろしければごらんになってください。

（「金星」管理人ゴッホ のサイトで掲載していたものを訂正加筆してこちらにまとめています）

設定

設定

ざっとした概要としては・・・

ナルトが戸籍上女の子で、イタチと恋仲になり、基本は公式のストーリーを辿るものの、綱手登場あたりから完全パラレルオリジナルな内容のお話です。

以下、箇条書。

- ・ナルトが戸籍上女の子です。
- ・ナルトは四代目の子供です。
- ・ちなみに四代目は生きています。
- ・ナルトは四代目の愛のスパルタのお陰で、下忍現在暗部に顔を出すほどの実力者です。（かといってスレナルではない・・・）
- ・普段は四代目考案の左手の呪印で九尾のチャクラを二重に封印していて、その呪印のせいであまくチャクラを練れないので、ドジでウストラトンカチです。
- ・小さい頃から駄目なオトナの四代目に代わって主婦じみた事をやっていたので家事は完璧です。もちラーメンは好物ですが・・・

- ・イタチさんは一族を滅ぼしても里抜けしてもいません。
- ・ただ九尾の一件でうちは一族はイタチとサスケ兄弟のみが生き残

っている状態で、今はサスケと2人暮らしです。

・イタチさんは現在暗部配属です。下忍の監督上忍になったカカシに代わり、四代目の護衛任務多し。

・カカシ先生は四代目の弟子です。

・しいていうなら、3代目↓自来也のじじい↓四代目↓カカシ↓ナルトみたいな師弟関係です。

・ちなみにナルト総受け（えっちい意味ではなく、みんなナルトが大好きって意味）

・なにがなんでもイタナルコ。

・年齢差5つの恋愛で頑張りたいと思います。

切に望む（前書き）

うずまき家の朝。ナルト12歳頃。

切に望む

切に望む

少し古びた家々や、人間などやすやすと踏みつづし、ひと飲みにしてしまうほど巨な獣たちの棲む森の向こう、遠く東からこぼれんばかりの光を纏って、強い白光の太陽が昇ってくる。
その輪郭からあふれる橙が、木の葉の里のシンボルのな火影岩に濃い影を作って、黄色と黒のコントラストが美しく目に映る。

・・・などのんびり窓の外を眺める暇もなく、忍の朝は始まる。
里長である火影の家ともなると尚更である。

ボタン！、と勢いよくドアを開けたのは、金色に輝く髪をツインテールにした少女。

両頬には細い筆でひいたような痣が3本ずつ。
華奢な身体をオレンジの忍衣で包み、仁王立ちする彼女の瞳は晴天のように澄んだ青。

「おとうさん、朝だよー」

一応最初は控え目に小声で言ってみる。

目の前ですやすやと寝息を立て、ベッドに潜り込んでいる父の表情には連日にわたる仕事による疲れがありありと浮かんでいる。
初めから大声で起こすのは酷だ。

「おとうさん!!」

ゆさゆさと布団から覗く、男にしては細い肩を揺するが、返ってくるのは「うーん」といううめき声だけ。

その反応に彼女は眉間に皺を寄せた。

毎朝の事ながら、父の寝起きの悪さには舌を巻いてしまう。

早くしないと、火加減に注意して焼いた半熟の目玉焼きが冷めて硬くなってしまう。

なにより早く朝食を済ませてくれないと後かたづけもできないし、洗濯だってまだ残っている。

「仕方がない」

彼女は腹に力を込めると、えい!と布団を思いつきりひっぱった。

「・・・っどわああっ・・・!!」

ひっぱった布団と一緒に父がベットから転げ落ちてそんな声を上げるが、いつもの事なので気にしない。

「あいたたた・・・ひっどいなあーこれが娘のする事かなあ・・・」

「やかましい！」

わざとらしく腕をさするので睨むと、相手はにへらへらと笑んだ。

「あははーごめん。起こしてくれてありがとう。おはよう、ナルト」

ナルトはそこで初めて頬をゆるめて、満面の笑みで応えた。

12年前、突如として木の葉の里を天災が襲った。

九尾の妖狐の原因不明の襲来。

里はよもや壊滅とまでに追い込まれた。

それを阻止したのは、木の葉の里を治める四代目・火影であった。禁術を発動し、生まれたばかりの自分の子に九尾を封印した。

その際の禁術のために彼の妻であり、九尾を宿した子の母は命を落とした。

九尾の破壊的なチャクラの気配は消え去り、里には平穏が戻った。だが、人々の深い悲しみは強い憎しみに変わり、彼らの心に残された。

日に日にそれは増してゆき、抑えられなくなった。

そして、はき出した。

虐待や蔑みとして。

妖狐を宿した子に。

それはとても悲惨なものだった。

何か騒ぎがあったと思って探し出し、見つけたその身体はいつも傷

だらけで、痛々しい痣が目を覆いたくなるほどだった。

それに反し、子の父、四代目への対偶　は、まさに天と地の差があった。

里の人々は過大なまでに四代目を崇高し、それこそ神のように扱った。そのギャップに、四代目は父親としても、火影としても黙っていられなくなった。

本当の英雄が誰なのか何故わからない？
本当に辛いのは誰なのか何故気づけない？

恐怖心からそのような行動に出るのはわかる。

だが、もしもだ。

もしも天災を赤子ではなく自分の身に封じていたら、里人たちは自分にも同じ行動に出ただろうか・・・？

自分に封じる事は可能だった。

もともとそのつもりだった。

だが、妻が自分たちの子を抱いて 言ったのだ。

「木の葉の里は、火影であるあなたを失うわけにはいかない。私があなたの代わりになります」

お産後のためにひどく青白い顔で言ったのだ。

今思えば出血で立ち上がる事もままならないはずなのに、彼女は赤子を抱いて、九尾と対峙した自分を追ってきたのだ。

そんな彼女の瞳は とても強く、彼女の言葉を裏切る事ができなかった。

だが、お産後で気力、体力共に限界ぎりぎりであった妻の身に、脅威的な九尾を封じる事は不可能だった。

彼女の身体が耐えきれず、術の発動中に壊れ、九尾のチャクラが溢れ出せば、自分も、赤子も、里もひとたまりもない。

絶望的なことに、現役を退いた三代目火影はちょうど遠方に任務に出かけていて里にはいない。

自分しか、里を守る者はいないのだ。

四代目は妻の抱く赤子に目を向けた。

生きている事をその声で表しているかのように激しく 泣く娘に、
四代目は覚悟を決めた。

それを聞いた妻は微かに眉を顰めたが、刹那こぼれんばかりに微笑んだ。

母親のとてもあたたかい笑みだった。

「私とあなたの子ですもの。きっと・・・いえ、必ず立派に制してくれる」

科学的には言い表せない、生まれたばかりという事と、妻の言葉に
四代目は動いた。

妻の身体に印を結び、娘に九尾を封印した。

今思えば、妻の身体で術を発動したにしても、何故迷わず自分の
身に封じなかったのか、ただただ後悔するばかり。

何にしても、もう手遅れなのだ。

自分の後悔も。

我が子の運命も。

里の人々のふるまいも。

火影からの悲鳴じみた警告に、里の人々の暴行はぴたりと止んだ。ひとまずこれで事態の悪化は防げる。そう安堵したのもつかの間だった。

しばらくすると、里の人々は、子供を完全に無視しだしたのだ。決して声をかけることも、触れる事もしないで、ただその目に冷たい憎しみと怒りを込めて見つめる。

存在そのものの拒絶は、子供に絶大な孤独感を与えた。

身体に受けた傷は、九尾のチャクラも手伝っていつかは消えてしまっが、心に受ける傷は蓄積されるばかりで、完全に癒せはしない。

存在を拒否された子供は、いつしか心から笑うことも、泣くこともできなくなってしまった。

父がそのことを哀れみ、自分の非力さを嘆き、涙を堪えて、「すまない」と謝罪して抱きしめたことは何度だろう。

その度に、その子は言うのだ。

「私は大丈夫だよ」と。

私には、父さんやじっちゃんがいるし、里の人の中には私に優しくしてくれる人もいる。

だから 全然だいじょうだよ、と。

子供にはない色をその目に浮かべて笑うのだ。

小さな小さな手で自分 を抱きしめ返してくれるのだ。

この子は自分を恨んでいない。

里の人々を恨んでいない。

父としても驚くほどに、娘はまっすぐ素直に、誰よりも優しい子に育った。

お人好しだと言われたらそうだろう。

馬鹿だと言われたらそうだろう。

だが、それだからこそ、父は子を愛していた。

ナルトは今年で12歳になった。

苦悩の末にアカデミーを卒業し、下忍になった。

下忍になって 数週間。

以前は自分が結っていた髪も、今では自分で結えるまでに女の子らしくもなってきた。

また、小さい頃から自然と家事をこなしていたせいか、料理の腕はピカイチだ。

朝食に並ぶみ そ汁からは、かつおぶしの良い匂いがしている。

にへら、と四代目は目尻を下げた。

「俺って子育ての天才かもね〜ん」

「あーもう・無駄口たたいてる暇あったら早く食べてよ。今日は集合時間早いんだから」

自分に反して時間に厳しいナルトの鋭い声に、だがしかし四代目は食い下がる。

「どうせカシくんが遅刻してくるんだから一緒でしょ？」

「ったく。先生がそんなだから生徒に遅刻くせがついたんだってば！毎度サクラちゃんにあた られる私の気も考えてほしいってばよ」

本当に腹を立てているのだろう。

塩鮭をおかずに白飯をかき込むように食べて、挙げ句にずーっと音を立ててみそ汁を飲み干している。

女らしくなったというのは訂正・・・やはり女手がないせいか、少々下品に育ってしまった。

男らしいといえはしつくりくるほどに。

どうしたもんかと お茶をすすって考えてみるが、そこは天下の四代目。

何か浮かぶわけもなく、「お弁当だって ば」と渡された渦巻き印の弁当箱に、またひへらつと笑って弁当箱を受け取る。

単に親馬鹿なのだ。

再びお茶をすすりながら、ふと四代目は後かたづけを始めているナルトを見つめた。

「ねえナルト」

「ん、何？」

流れる水の音と、カチャカチャと陶器のあたる音がする。

視線は、袖をまくりあげているために露わになったナルトの左手首に固定される。

そこには、手首をぐるりと一回り、入れ墨のようにして読みにくい画数の多い漢字が並んでいる。

「実力・・・いつまで隠してる予定？」

一瞬、カチャと音が止まった。

水の音だけが空気を震わせた。

かさり、と窓際の観葉植物の葉が風に揺れた、ほんの少し後で、ナルトの少し高い声がした。

「まだ、ちゃんと制御できないから、もうしばらくつけてるってば」「そうは言うけど・・・暗部の任務でドジった事ないでしょ？Sラックでちゃんと九尾のチャクラの制御できてるんだから、普段わざわざ呪印でチャクラ抑圧する必要ないじゃない」

四代目の言葉通り、実はナルト、実力は下忍レベルじゃなく、暗部の任務をこなせるほどのレベルだったりする。

ナルトの左手首の呪印は、チャクラの流量をあえて止め、チャクラを練りにくくするもので、己に宿る九尾を危惧してナルトが四代

目に頼んで施してもらったものだっただ。

その呪印は特定の解除法を知っている者にか解けないもので、呪印を施した四代目と、ナルト しか解除法を知らない。

ナルトは暗部の任務の時にだけ呪印を解き、本来の力で戦いに臨む。

状況にあわせて解くか否かを判断しているのだ。

「いやーまー・・・それはそうだけど・・・もしもって事があるじゃん？保険かけとくのに越したことないってばよ」

キュと蛇口を閉めて振り返った彼女は、気持ちの良いほどのからりとした笑顔だった。

自分と 同じ色彩でも印象の違う、金の髪と、碧い瞳の少女の笑顔は、太陽のように目映い。

（この子が一番九尾を恐れている）

否、人を傷つける事を恐れている。

四代目は秀麗な眉を顰めた。

ちりりと心が痛む。

身支度をして、忍具やら弁当やらの入ったリュックを背負ったその背中、どこか逞しく、どこか寂しげで・・・だから四代目は

微笑んだ。

「いってきますっばー!」

「うん、いってらっしゃい」

スリーマンセル制のおかげで生まれて初めて友達と呼べる人が出来たようで、毎日楽しそうだから、だからいつか・・

(いつか・・心から笑える日がくるよね・・)

迷惑ばかりかける自分を愛してくれてありがとう。

ボタン・・と玄関のドアが閉まる音がした。

今日もつずまき家の一日が始まる。

月を読む 1

噂を聞いた。

些細といえは些細な噂であったが、それが飛び交うのが暗部内となると、少し ニュアンスが違ってくる。

場所はここ上忍の待機場所「人生色々」である。

「知ってるか？すべての任務を無傷で帰ってくるヤツがいるらしいぜ」

「ああー知ってる知ってる！すげえよなあ。俺なんかいつも切り傷の一つや二つ作ってくるっつの」

「俺もー。でも12歳って話だろ？かなりすごいよな」

「12！？それほんとか？うっわー」

「その上女らしいぜ。俺なんかより強いくのーなんざたくさんいるだろうけど、12歳より弱いかもしれないってのは痛いよなー」

「・・・俺自信なくしそう。でも会ってみたいなー・任務一緒にしないかな」

という会話をここ最近幾度となく耳にした。

くだらない・・・とうちはイタチは茶をすすった。

背に少し流れる鴉の羽のような漆黒の髪をゆるく一つに束ね、額に
まいた木の葉のマークは数え切れないほど戦闘をこなしてきたせい
か、細かいキズで金属がところどころこぼれ、白くにぶい磨製され
た色を見せている。

首元の大きく開いた上着の背には、今は中上忍が着用を義務づけら
れているベストのために見えないがうちはの家紋が染め上げられて
いる。

木の葉の里随一とうたわれる血継限界「写輪眼」を意のままに使い
こなすという事と、それを除いてのすさまじい戦闘能力のために彼
は里のみならずかなり有名であった。

そんな彼は任務が一段落した事もあり、軽食をとり今は食後の一杯
をやっている。

あくまで緑茶だが。

と、イタチの向かいの席に腰を下ろした者がいた。

「ここ3日間連続で任務だったって聞いたから家で休んでるかと思
ったけど、ここにいたんだ。いやあゝわざわざお前んち行く手間省
けて助かったよ」

そう言うてにんまりと笑ったので、顔下半分を隠している布に皺が
寄った。

イタチは湯飲みを置くと訝しげな視線を相手に向けた。

「何の用ですか？」

「あ、なあーにその言い方。可愛くないねえ」

あんたに可愛いと言われても嬉しくない。イタチは変わらない表情

の裏で思った。

「ま、いいや。ところでさ、月読って知ってる？」

イタチは秀麗な柳眉を顰めた。

露骨な反応に力カシは苦笑すると続けた。

「どう思う？」

「・・・どうと言われても」

正直イタチにとっては関心のない事だったので何ら思う事はない。
しいていえば己の血継限界の眼術のひとつと名称が同じだと思うく
らいだ。

「実際に見てみない事には何とも言えません」

「まあ・・・ね。今まで単独任務が多かったらしいからな」。俺も会
った事ないし・・・でも今度ツーマンセル組まれるらしいよ」

「四代目がおっしゃったんですか？」

噂にはデマが多い。

聞くと力カシは頷いた。

「参考にしたいって聞かれたのよ」

「月読のパートナーに誰がいいかですか？」

「そうそう、だからお前を推薦しといたから」

「・・・は？」

湯飲みに手を伸ばしていた手が思わず止まった。

「何で俺を推薦したんですか？」

「いやーだって条件にぴったりだったんだもん」

「条件？」

「経験豊富で他人に干渉なくて腕が立って任務成功率90%以上
って条件」

一息に言われ、イタチは再度ため息をついた。

「その事を言うために俺の所にきたんですか？」

「一応知らせといた方がいいと思ってさ。ま、そゆ事でツーマンセル組んだらどんな感じか今度教えてね。じゃ」

カカシはひとつ手を振ると、そこさと店の暖簾をくぐっていった。
しまった。

残されたイタチは重いため息をひとつと、だいぶ冷めてしまったお茶を一気に飲み干した。
少しだけ頭がすっきりとして、今度は安堵の息を漏らしたとき、ふゆい！と小さな影が店に入ってきた。

伝令鳥だ。

伝令鳥はイタチの手元に手のひらほどの大きさの巻き手紙を落とし、またふゆい！と飛んで行った。まさかと思って心なしか急いでそれを広げたイタチは微かに目を見開いた。

本日夕刻火影邸に來られたし。

イタチは何度目かのため息をついた。

「任務内容は二人とも読んだね？」

黒と白の暗部装束を身に纏い、背に鰐が四角くごく薄い刃の真っ直ぐ伸びた太刀を負い、顔に

は白塗りの面を付けた二人の忍に四代目は確認するように微笑んだ。

「失敗すると後々困るやつだから二人とも頑張ってね。ああそうだ。イタチはここ最近連続で任

務が続いてたから疲れが出るかもしれない。月読、フォロー頼むね」
「はい」

そう高く澄んだ声で答えた隣をイタチは振り返った。

そう、隣にるのは月読なのだ。

身長は自分よりも頭二つ分ほど低く、華奢な体躯のせいか背の太刀がかなり大きく見える。

腰にまで届きそうなほど長い黒髪は少しのくせもなく滝のように背に流れ、それに覆われるように顔にはまった面は、右頬に朱色で滴のような形の点が縦に三つ描かれただけのとてもシンプルなものだった。

と、イタチの視線に気づいたのか、月読がイタチに顔を向けた。表情の変わらない無機質な面がこちらを向いている。

視線が絡み、ふと相手の瞳が青だという事に気づいた。

どこまでも澄み切った水のような、果てしなく広がる空のような、そんな碧。

自分の不躰な視線を真っ向から見返すそれはとても人を殺せるような目には見えなかった。

今まで単独で任務をこなし、そのすべてを無傷で帰ってきたという噂は本当なのだろうか。

ふいにその青が動いた。

瞳が少しだけ横にのびて、どこか潤んだように見える。

（笑った・・・？）

嘲りや哀れみの類の笑みではなく、やわらかく包み込むような労りの笑み。

それは決して不快ではなかった。

思わず魅入りそうになるイタチを止めたのは四代目だった。

「では時間厳守で頼む。・・・もしもの時は任務を放棄してくれて構わない。生きて帰ってきてくれ」

厳かな四代目の声に二人は一瞬だけそちらに顔を向け首肯すると、どろんと煙を残して姿を消した。

気配が同じ方向にもものすごいスピードで遠ざかっていく。

四代目はふうーと大きく腕を伸ばして深呼吸すると、机に頬杖をついた。

事務用の横長の机には、端から端まで見上げてしまふ高さで自分が推考し、納得したうえで判を押すべき書類が積まれ、並べられている。

明日までにこの半分でも終わらせておかないと里の責務が滞ってしまふ。

四代目は適当に書類をとると、右手で判子をくるくるまわしながら読み進めていく。

「全く・・・カカシの言ってること違うじゃない。明日昼休みにでも説教しにでも行くかな」

とん、と朱印を押して次の書類へと目を走らす。

口は動いたままだ。

「なあーにが干渉だよ。イタチ、めっちゃめっちゃ気にしてたじゃん。月読がナルトだってバレたらどうしてくれるんだよー」

あんなにじーっと見つめちゃってさー。

とん、とん・・・と下忍に任せられる任務の多かったせいも案外スムーズに判子が押されていく。

「まあー深追いはされないと思うし・・・イタチなら最悪自分を偽性にしても任務遂行してナルトも守ってくれると思うけど・・・」

一人だと万が一命を落とす可能性があるとなると三代目に言われてツーマンセルを考えてみたものの・・・。

「うちはをナルトに近づけるのはきついな。うちはにとって九尾は仇になるよな・・・」

依然として血継限界最強と謳われる写輪眼の名家うちはの者は里に二人しかいない。

若干15歳の宗主であるうちはイタチと、その弟であるサスケだ。

「12年前の九尾の襲来でうちは一族は二人を残して全滅。九尾も派手にやってくれたもんだ」

ずるずると机に突っ伏してつぶやく。

「あーしまったなあー。俺人選ミスしたかなー・・・でもイタチは復讐とか仇討ちとかわざわざしなさそうだから大丈夫かな・・・」

あー、もうそもそもナルトの暗部入隊を反対すれば良かったけど、

あの子強いからなあー。ぐ

ずぐずとしばらく考えあぐねた末、四代目は身体を起こした。

「ま、仕方ないか」

自分が悩んだところで事態が好転するわけではない。そもそもまだ何も起こってはいないのだ。

さっさと仕事終わらせて、作っておいてくれる晩ご飯食べよう
と・・・。

月読の戦い方は見事としか言い様がなかった。

上忍レベルの敵の忍を一人ずつ、ときには二、三人同時に着実に仕留めていく。

それも確実に一撃でだ。

深い森の中、しかも夜の暗闇の中でも、動きに無駄はなく、迷いもなく、とても俊敏だ。

するすると敵のクナイや手裏剣も避け、腕に添うように構えた太刀で仕留め、すぐさま敵から離れるために返り血を浴びることもない。

彼女の髪は、暗黒の中でもわかるほどに艶やかに宙に舞っている。

辺りを見下ろせる高さの木に枝に膝を突いて座り、月読の攻撃範囲から散り、群から離れた敵をクナイでこちらの一撃で倒しながら、イタチは眼下にの光景を食い入るように見ていた。

流れるような彼女の動きは目で追わずにはおれなかった。

彼女が自分の調子を気遣ってか、自分が接近戦をしかけるから援護を少々不安だった。

しかし彼女が駄目なようなら自分が出て行けばいいだけの事だとその申し出を受けた。

なるほど、彼女は申し出るだけの実力を十二分に備えているようだ。

敵の数はだいぶ減ってきていた。

任務内容は以前何者かが持ち出した木の葉秘蔵の禁術をまとめた巻物の奪還と、持ち出した者の割り当てだ。

奪還といっても大本の巻物は盗まれた数刻後に取り戻したのだが、敵も油断ない者で、巻物の一部をコピーしていたのだ。

そして今夜その受け渡しが行われると情報があつた。

直接的に戦争になりはしないだろうが、どこかの里にコピーが渡つたら、遅かれ早かれ木の葉にとって致命傷になる。

敵もその利用価値を心得ているからだろう。

その場には数十人の忍がいた。

ただ受け渡しの相手側の人間はまだ来ていないようだった。

その事はすでに月読の攻撃が始まった後に気付いたことなので、来ていたとしても騒ぎに気付いて早々に引き上げてしまっただろう。

この際望めるのはコピーの奪還、もしくは排除。

後者のほうがてっとり早いだろう。

イタチはホルダーに手を伸ばしつつ、それまでいた木の枝を強く蹴った。

背を反らせるようにして飛び、下を仰ぎ見る。

ふっと一度目を閉じ、次の瞬間開けられた彼の瞳は曇りのない漆黒から、血を思わせる鮮やかな緋色へと色彩を変えていた。

紅に浮かぶ黒でひかれた二重円と、外側の円に絡むようにのっている3つの巴型の模様。

木の葉の誇る血継限界・写輪眼。

(4人・・・いや6人・・・)

月読のそばに3人。

自分と同じ高度の、20メートルほど離れた木の枝に1人。
もつと後ろの木にもう1人。

そして自分の背後に1人。

下の3人はほどなく月読が倒すだろう。

ゆえに自分が狙うのは残りの3人。

イタチは思った瞬間に腕を振った。

手応えを確認する前に上半身をひねり、身体を回転しつつもう一手。
数秒後に刃が肉にもぐる音をうめき声が1つ、2つした。

・・・1 つ足りない。

（はずしたか）

前日までの疲れは想像よりもはるかに身体に残っているらしい。
ざっと音が立つのも気にせず小枝をなぎ払って一番近い枝に降り
つく。

すでに敵に自分の場所はバレている。

物音を気にしている暇はない。

木の間から月読の様子を窺うと、彼女はすでに2人倒し、残りの1
人に斬りかかろうとしているところだった。

（問題は月読ではなく自分だ）

どこから仕掛けてくる？

写輪眼をあたりに巡らせ、気配を探る。

上。

そう感じた瞬間に頭上の木の葉の中から銀色の光が躍り出た。
咄嗟に足にチャクラを溜め、自分の乗っていた枝を思いっきり踏み
壊し下へと逃れるが間に合わない。チャクラによって粉碎された木

の破片の間を、太刀が垂直に落ちてくる。

このままでは落下した末地面に激突するか、着地して太刀に斬られるかどちらかだ。

疲れがすべての感覚を鈍らせる。

イタチは顔をしかめると身体を折りクナイを投げた。

敵がそれを避けたその隙に着地をとる。

しかしかすかに反応が鈍ったその瞬間を狙われた。

「・・・っ！」

右足に熱い痛みが走る。

身体が反射的に強張るのを何とか制し、転がって敵との間合いをとったが、跳ねるように着地をとった敵はすぐさま木の幹を蹴り向かってきた。

武器を取る暇はない。

第2打を防ぎきれない。

そう判断して腕で防御の構えをとった時だった。

甲高い音がしたかと思うと、それに続いてずん！とにぶい嫌な音がして敵の太刀が止まった。

イタチは知らず目を見開いた。

「月読！」

太刀を止めたのは紛れもなく月読だった。

彼女は左腕そのもので太刀を受け止めていた。

暗部共通の白い防具は無惨にも砕け、太刀の食い込んでいる所からは止めどなく血が噴き出している。

月読は一瞬ひるんだ敵の喉をためらいもなく掻き斬った。
ぱん！と血潮が跳ね上がる。

敵の血と自分の血を浴び、彼女は全身を真っ赤に染めた。

白い面が脂でひかるのに対して、艶やかだった髪は血を吸ってどす黒くなっていた。

どさ、と力を失った身体が地に伏すと、月読はイタチが止める間を与えぬほど自然な動作で左腕に埋まった太刀を引き抜いた。その衝撃に新たに血が噴き出し、ぽたぽたと落ちて地面にしみをつくっていく。

「つく・・・読・・・」

「・・・大丈夫ですか？」

そう言っただけイタチのもとに膝をつき、斬られた足を見ようとする月読をイタチは啞然と見た。

（こいつ・・・）

何とも言い難いぐらい腹が立ってイタチは月読ののばした右手を掴んだ。

「俺の心配よりも自分の心配をしろ。早く止血しないと死ぬぞ」

「いや私は・・・」

「助けてもらったのは感謝する」

自分の爪の甘さの尻ぬぐいをしてくれたのだ。謝念は当然ある。

だが、とイタチは月読の面を睨んだ。自分を助けておいて己の身を省みない行動がかんに障った。

「傷を見せろ」

怒気をはらんだ声に月読はしばし躊躇ったすえ、かすかに痙攣している左腕を差し出した。

イタチは顔をしかめた。

傷は骨まで達していた。

皮膚は醜く潰れ、未だ出血がひどい。

ふれる指先が変に強張ったり力がなかったりしている。

イタチは面を外すと、ホルダーから分厚めの包帯を出し、それで左肩をきつく縛った。

腕を上げさせ肘のところもしばる。

次に消毒薬のついたガーゼをとりだし傷口に押し当てる。

とたん走った痛みにも月読が呻いた。

「・・・っ!!」

「我慢してくれ」

しばらくガーゼを押し付ける。

それでもひどい出血と、痛みからくる腕の痙攣は続いたが、とりあえず止血はできた。

新しくガーゼを出し、傷口にあてて別に取り出した薄手の包帯を巻いて固定する。

念のためにはめていた自分の手袋をはずし、そっとはめてやる。

月読の腕は自分より幾分か小さいので傷口を締め付けはしないだろうし、こうしておけば包帯がずれることはない。

最後に止血のための関節部分の包帯を外す。

完璧な処置とはいえないかもしれないが、このまま早く病院につれていくしかない。

そこまで無言で手当をして、イタチは長く息をはいた。

「・・・俺のミスだ。すまなかった」

「そんな・・・謝るのは私です。ちゃんとフォローができなくて・・・ごめんなさい」

「俺の不手際が招いた事だ。お前が謝る必要などない。それより早く後始末をして帰ろう。お前の腕を医者に見せないと・・・」

イタチは一度月読から視線をはずし、俯いて斬られた右足を確認する。

予想より傷は浅かった。

月読の怪我と比べたら可愛いものだ。

染みるような痛みがないことから毒のおそれもない。

イタチは簡単に包帯を巻いて立ち上がった。

それにつられてしゃがんでいた月読も立ち上がる。

鬱蒼とした木々の元、月明かりを頼りに2人は辺りを見回した。

月読が接近戦をしかけたおかげで死体がほぼ一力所にかたまっている。

これならわざわざ集めなくても、火遁で一瞬で任務が終了できる。

イタチはすぐに印を結び、草の間をぬって火球を放った。

とたん広がった紅の光に一瞬間が途切れ、暗闇を炎が赤い触手で撫でる乾いた音が辺りに響き渡った。

「あの」

月読の澄んだ声が響いたので振り返ると、彼女は俯いて、どこか決まりが悪そうに立っていた。

「手当て、有り難うございました」

「・・・？」

「後は大丈夫です。少し寄りたい所があるので先に失礼します」

（寄りたい所？）

疑問符を浮かべるイタチだったが、それよりも彼女の身が気になった。

「構わないが、万が一襲撃されたらどうするつもりだ？」

敵の核部分は始末したが、もしかしたらまだ敵がいるかもしれない。せつかく手に入れたコピーを消去された挙げ句仲間を殺されたのだ。出会ったらただではすまされないだろう。

そうでなくても暗部は何かと目の敵にされる存在だ。

含むところを持つ者に遭遇したらただですまないかもしれない。

手負いの彼女が応戦できるかなど考えるまでもない。

片腕があれば印も結べないのだ。

押し黙った月読にイタチは質問を重ねた。

「里の方向なのか？」

「里の敷地内は敷地内です」

「ではそこまで同行しよう」

「えっ！！それは・・・ちょっと・・・」

しぶる月読にイタチは目を細めた。

「お前の私用を知りたいわけじゃない。お前の護衛がしたいだけだ」

「その気持ちだけで十分です」

顔を上げて月読は首を横に振った。

「だが・・・」

「すみません」

食い下がるイタチの声を月読は遮った。

刹那小柄な影が視界から消えた。

「・・・全く・・・」

反射的にイタチは月読の気配を追った。

月を読む2

（なんて速さだ）

右足の傷が痛むが、イタチは構わず飛んだ。
未だ月読との距離は数メートルはある。
迷っているはずにまかれる。

体力はまだ持ちそうだが、半刻ほど真剣に走っているとさすがに
疲れてくる。
すでに里までほどこない所まで来ていた。

（一体どこに行くつもりだ。この先は里の森に入るだけだぞ）

枝の間から里の防壁が視界に入り始めているが、月読のスピードは俄然落ちる様子がない。

2人は山腹を縫うように登っていた。

「！」

イタチは急に進むのをやめ、足場になっていた木の枝から飛び降りた。空中で前転し、空気抵抗をつけて着地する。

「・・・気配が・・・消えた？」

今自分が立っているところで、忽然と消えたのだ。何かに掻き消されたように一瞬にして。

イタチは視線をせわしなく四方に向けた。

かすかに上がった呼吸を落ち着かせ、じっと神経を張りつめる。じんわりと目が熱くなった。

イタチはちょうど前方で視線をぴたりと止めた。目を凝らし、ひっかかったものを見極める。

（これは・・・）

前方の森一帯にチャクラの膜が張られている。
――結界だ。
確かめるようにイタチはそれに手を伸ばした。
ちりり、と火にかすったような痛みが走ったが、するりと手は結界を越えた。

（侵入者を拒む類ではない……。だが）

一歩でて半身を結界の向こうに入れて、イタチは頷いた。
結界の向こうは全く景観が変わっていた。

何もせずにこの結界を越えれば、知らず森の中をぐるぐると彷徨わ
されることになっていただろう。

結界に隠れるようにして幻術が張られているためだ。

とても無造作に見えるその二つの忍術にイタチは感嘆した。

（見たところ半永久的なものだな。・・・月読か）

凝っては以内が、永続的なものであれば凡人にできるものじゃない。
半身を結界のこちら側にもどし、もう一度イタチは視線を彷徨わ
せた。

今度は結界を這うように目を凝らす。

（どこかに抜け穴があるはずだ）

これほどの術を解くのは正直骨が折れる。
少しでもチャクラが弱まっている所を見つけて部分的に破壊したほうが効率がいい。

目的の場所はすぐに見つけられた。
すこし左手の方向の下方。

イタチはそこに片膝をつき、かけられている幻術を解くべく、反対の印を結ぶ。

ぱん！、と乾いた音がして、そこだけ幻術が破壊された。
これだけ微弱的な破壊ならば月読に気づかれないだろう。
イタチはそこをくぐった。

月読の気配はすぐに見つけられた。

思ったよりもずっと近いが、何か月読のいるだろう方向から響いてくる音がある。

何かが流れ落ちる盛大な音だ。

夜の静寂を破るそれは、けれど自然の景観を壊すものではない。

「・・・滝？」

訝しげにつぶやいて、イタチはそちらへ歩きだした。

針葉樹の立ち並ぶ森をしばらく歩くと、次第に視界が開けてきた。

目線の上のほうに大きな岩と下へと動くものが見える。

やはり滝のようだ。

木々がなくなっただけ、地面を覆うのは笹になり、少し歩きづらい。

奔放に生えている笹をかき分けて、イタチは岩場に出た。
彼のいる所からほどない距離に 怒濤のごとく飛沫をあげる滝があった。

夜の滝はその身を漆黒にし、あたかも黒い龍のようだ。

絶対的な存在感に、イタチを一瞬息を止めた。

そうして滝に近づこうと歩を進めようとした時、見つけた。

滝のすぐそばに、ぼうつと小柄な影が見える。

月読だ。

思わず動きを止めたイタチの見る前で、月明かりにほのかに浮かぶ彼女はふいに左腕を伸ばした。

イタチのはめた手袋をはずし、包帯もはがす。

次の瞬間イタチは我が目を疑った。

（傷が・・・ない？）

淡い月光に浮かぶ彼女の腕は、イタチのしている所からでも真っ白で、どこにも傷なんて見えなかった。

（馬鹿な・・・そんなはずは・・・）

驚愕するイタチの前で、月読は黙々と動いていた。

手当てに使われていた包帯やらを丁寧に畳みホルダーにしまつと、目にも止まらぬ速さで何か印を結んだ。

ぼん、と煙に覆われ、その中から出てきた彼女は月読であって月読

でなかった。

（金の・・・？変化していたのか？）

漆黒だった髪は、金色になっていた。

金の鱗粉を振りまくしれは神々しいばかりに輝いている。
所々付いた血が黒く変色しているが、そんな事が気にならないほど
美しいものだった。

イタチは空に舞うそれに、心から魅入った。

そして、月読の手が顔に伸ばされ、面がとられた。
容貌が露わになる。

腕と同じ白磁の肌に、血色の少し欠けた唇。
頬には引つ搔いたようなあざが左右三つずつ。
変化していたのは髪だけだったようで、瞳は青のままだった。
金の睫に縁取られたそれは水晶のように光っている。

誰だ・・・？ いや・・・自分はあれが何者は知っている。

木の葉の里の者ならば誰でも知っている。
イタチはつぶやいた。

「うずまき・・・ナルト」

弾かれたようにこちらを見た彼女の顔には、これでもかと驚倒の色が浮かんでいた。

(うそだってばーーーー!!!!!!またと思ったのに何でここに
いるんだってば!!!!?)

ナルトは身動きがとれないほどに慌てた。

もう頭の中はショートしそうで、それは口調が普段のそれに戻るほどだった。

火影岩から見て右側を囲む山腹の一端にあるここはナルトの隠れ家的場所だった。

幼い頃、里の人々の目に付かない所はないかと森に入り、山腹を登っているうちに見つけたのだ。

家では忍術の修行はできないし、かといって里の演習場や周辺の森では里の人の目に付く。

ここは里からあまり離れていないが、わざわざ山を登ってくる人は少ないし、いたとしてももっと山裾のほうで狩りをしたり山菜を採

って帰ってしまうのでここまでは誰もこない。

それでも念のためにと結界を張り、幻術をかけた。

そうする事の自分のエゴに気が引ける部分はあったが、これ以上里の人々に冷たい目で見られるのは耐え難かった。

滝の脇には巨木がある。

真っ白な幹の、冬でも細長い三日月のような葉を茂らせる不思議な木だった。

その木の中は室になっていて、うねる根の間からそこに入ることができる。

ナルトはそこに修行用の巻物やら忍具やらを持ち込んでいた。

暗部となつてからはここで支度をしている。

家や火影邸で支度をして、入る所や出て行く所を万が一見られ、自分が暗部であることがバレたら父に迷惑がかかる。

九尾の器である自分は目立つ事を極力避けた方がいいのだ。

里の運営的に無視できないほどの力を身につけていたとしても、それを表に出しては何が起こるかわからない。

人前では呪印の影響を受けて、ドベでお調子者でいればいい。

というわけで任務を済ませたナルトがここに辿り着き、さあ着替えよう！と変化を解いた時イタチの声が聞こえたもんだからたまったもんじゃない。

（ど・・・どうしよう・・・私が月読だつてばれちゃったつてばよ・・・）

父には何があるがわからないから絶対に正体がばれないようにと言われている。

とりあえずーっ逃げる？

でも、今更逃げても正体がばれた事実は変わらない。

それに相手はあのうちはイタチだ。

今からうまく逃げられるわけがない。

（・・・っていうかうちは一族にとって九尾ってかなり危険だつてばよ！）

九尾はうちは一族を壊滅させた。

イタチが自分を快く思っているわけがない。

ダブルパンチのこれこそ絶体絶命。

ナルトの背筋を冷たい汗が滑り落ちた。

身を退きたい気持ちが表に出て、おずおずと後ろに下がった。
が、それはまずかった。

ナルトは汚れを落とそうと滝壺に非常に近い岩の端にいた。
そのため踏み下がった所に足場はなかった。
突然の浮遊感にナルトは悲鳴を上げた。

「えっ・・・！わっ嘘！」
「・・・っ！！」

イタチはとっさに瞬転してナルトの所まで飛ぶと、彼女の腕を掴んで引いた。
がくんとひっぱられたナルトは、そのまま反動でイタチに抱き留められた。

「・・はあ・・・助かったってばよ・・・って今はそれどころじゃない！」

ぱつとナルトは腕をつっぱってイタチから離れようとするが、彼が腕を掴んだまま咎めるような眼差しで見下ろしてきたので動けなくなってしまった。

低い声音がナルトの耳朵を打つ。

「また逃げるのか？」

「べっ、別に逃げてないってばよー!!」

「逃げようとしている」

「あんたが追っかけてくるからだってばよー!!」

「イタチだ」

「・・・は？」

「うちはイタチだ。名前ぐらい覚えてくれてもいいだろう」

イタチはそう言うとナルトの負傷していたはずの腕を見た。
そこにはやはり傷は残っていない。

（確か九尾の影響で・・・）

怪我をしても瞬く間に治ってしまうと聞いたことがある。

それにしてもこんなに早いものなのか。

なめらかな肌の感触に少し酔いしれながら、イタチは傷がないことを確認すると彼女の腕を放した。

ナルトはすぐに距離を置こうとしたが、イタチの様子に足をとめた。

彼の様子はあまり馴染みのないもので、ナルトは居心地の悪さを感じたが、危機感のようなものは感じなかった。

不思議そうな視線を相手に向ける。

「・・・えっと・・・イタチ・・・さんは・・・私の事・・・その・・・嫌いじゃないってば？」

「嫌いも何も今日会ったばかりだろう」

イタチはつぶやくと岩に腰掛けた。

目線が近くなったことにどきりとしながら、ナルトは問いを続けた。

「いやそれはそうだけど・・・だってイタチさん・・・うちはじゃん」
「俺がうちはだとお前を嫌うのか？お前は俺がうちはだから逃げるのか？」

「それは違う・・・別にイタチさんじゃなくても逃げたつてばよ」
「やはり逃げるつもりだったか」

「え！！あっ！！・・・っ・・・」

痛い所をつかれて頭を抱えるナルトは、外見に相応した普通の子供に見える。

本当に月読なのかと疑いたくなるほどだ。

イタチは苦笑すると自分からも問いかけた。

「お前、歳は？」

「お前じゃないつてば。ナルトだつてばよ」

むつとした声で返されたことに、イタチは笑みを深めると律儀に返した。

「悪い・・・ナルト、歳は？」

「今年で１２歳だつてばよ」

（そうか・・・サスケと同じ歳だったな・・・）

「いつから暗部に？」

「んー・・・3ヶ月ぐらい前だったかな・・・って何でこんな事聞くってば？」

小首を傾げると、謝罪を請う切なげな眼差しを向けられた。

「・・・嫌だったか？」

「へー？いや全然嫌じゃないってばよ！」

むしろナルトは嬉しかった。このように肉親やそれに近い人以外から質問されるのは初めてなのだ。

（イタチさんは私の事、嫌じゃないみたいだってばよ）

里の大人たちは自分を毛嫌いする。

温かく接してくれるのは父とその弟子のカカシ、師匠の自来也。

三代目にアカデミーのイルカや一楽のおっちゃんぐらいた。

物心ついたときから罵声を浴びていたので慣れたといえば慣れたが、やはりこうして普通に接してもらえるのは嬉しい。かなり嬉しい。

自然とにこにこするナルトをイタチは不思議に思ったが、質問を続けた。

「忍の技術は誰に教わった？火影様か？」

「うん。お父さんに習ったってばよ。エロ仙人にも習ったことあるってば」

「エロ仙人？」

「あ・・・えーっとお父さんの先生なんだけど・・・」

「まさか・・・三忍の自来也の事か？」

「そうそう！自来也だってば！なんでイタチさんがエロ仙人の名前知ってるってば？」

「忍なら誰でも知っていると思うが・・・」

三忍と言えば木の葉のみならず他里にも名が轟いている。

そんな三忍の１人と面識があるばかりか修行までつけてもらったというのにこの子の無頓着さは何だろう。

だがそれは好ましいものだといタチは受け止めた。

「小さい頃から修行してたのか？」

「うん！だから私ってば今はかなり強いってばよ！」

胸をはる彼女にイタチは苦笑した。

「確かに・・・一度手合わせを頼みたいな」

「ええーっ！！それは駄目だってばよ・・・」

「・・・駄目？」

「その・・・私と一緒にいるとこ見られたら、イタチさんに迷惑

かけるってだよ」

しゅん、と俯いてしまったナルトに、イタチは地雷を踏んだと自分を叱責した。

ナルトは「ー里の者から九尾憑として蔑まれ、四代目火影がいるというのに言葉にするのも躊躇われるようなことをされている。

四代目はなんとか歯止めをかけようとしているが、例え信頼の篤い四代目が出たとしても、恐怖心や怒りというものは簡単にはなくなるらない。

イタチ自身、九尾の妖狐事件についてはいろいろと思うこともあるが、実際にナルトと話してみても、負の感情は全く感じない。もともとあつた同情心や庇護の気持ちのほうが大きくなる。

「俺も、正直九尾は怖い。・・・うちは一族はあのときに壊滅したからな。父は九尾との戦闘で死に、母はあの時の怪我がもとでしばらくして死んだ」

「・・・」

ナルトがびくりと身体を震わせた。それに気づいたがイタチは続けた。

「四代目火影様は強い。俺なんかよりもずっと強い。忍としても・人としても」

「・・・何が言いたいんだってだよ?」

悲しげに揺れた晴天色の瞳を、イタチは真っ向から見返した。

「例えお前に封じられているのが九尾だとしても、俺はお前を怖いとは思わない」

里長を信頼している。

彼の術を信頼している。

だから恐怖心はない。

「それに、お前と話してみて、怖さもなにも感じない。俺は、お前を嫌おうとは思わないよ」

「・・・っ・・・」

ナルトは胸で詰まっていたものが溢れ出すのを止められなかった。とっさに顔を手で覆うが、それでも隠しきれずに零れたものをイタチに咎められる。

「なんで泣くんだ」

ため息をつき、立ち上がってすぐそばまできたイタチから俯いて顔を隠しながら、ナルトはひきつく声を絞り出した。

「っ・・・だって・・・だって・・・嬉しいんだってばよ・・・っ」

「・・・嬉しい？」

「・・・うん・・・そんな風に言ってもらえることなんて・・・一生ないと思っていたから・・・」

ぐず、と鼻をすすりながらも涙を拭い顔をあげたナルトは満面の笑顔だった。

任務開けでところどころ汚れた顔。

涙で目元もぐちゃぐちゃで・・・でも、花がやわらかくほころぶような愛らしい笑みに、イタチは大きく目を見開いた。

「・・・・・・っ」

「・・・イタチさん？」

微かに笑みをひっこめて小首を傾げ、潤んだ大きな目でこちらを見上げてくる様子に、イタチは顔が熱くなるのを感じた。

咄嗟に口元を手で覆うが、少しでもその笑みをみていたくて、顔は背けられない。

なぜだろう。

目の前の金の光を・・・無視できない。

何故もつと早くこの子と出会えなかったのだろう。

里にとつて、さまざまな意味で有名な少女だというのに。

イタチは複雑な思いを感じながらも安心させるために微笑むと、そつと指先でまだ残っている涙をぬぐってやった。

「もう一つ聞いて良いか？」
「いいってばよ」

ナルトはほどなくして泣きやんだ。
目の下が少し赤くなっているが、表情は明るい。
防具を外し、いつもの忍衣に着替えて、今は濡らしたタオルで髪の毛を落としている。
声をかけたイタチとはいえば、適当に歩き回ってナルトの隠れ家を物色していた。

「何で名前が月読なんだ？何か由来があるのか？」
「えっ・・・ああ、由来・・・あるってばよ」

どこか歯切れ悪くナルトは答えた。
ぎゅっ、と髪をタオルで挟む。
だいぶ血は落とせたが、つんとした鉄のにおいは消えない。
ナルトは顔をしかめた。
このにおいは嫌でも自分のした行為を思い出させる。
覚悟を決めた事でもやはり心のしこりがふさぶられる。

沈黙した彼女のそばにもどりながらイタチが再度声をかけた。

「ナルト？」

金色の頭が動く。

しばらくしてどこか掠れた声が響いた。

「・・・私が初めて殺した子が・・・私を見て月読って言ったんだってだよ」

その子は血継限界を持っていた。

誰にも手出しが出来ないほどに強力で、対処に困った地域政府が木の葉に依頼した。

事前調査の結果、いまだ五里がちゃんと形成される前に一族として名を馳せていた者達の子孫が先祖返りで能力がたのだろう、ということだった。

里で保護するか、という話もでたらしいが、結局は殺害するという事で任務が決まった。

「私よりもちっちゃくて・・・やせ細ってて・・・。私を見て、本当に嬉しそうに笑って、月読様がつれてってくれる。お父さんとお母さんの所に早くつれてってくれるって・・・」

その子は心から死を望んでいた。生きることが諦めたその子笑顔はとても忘れられない。

膝を立てて座り、その上に顔を置いてナルトは夢げに笑った。
イタチは黙ってその笑みを見つめていた。

「里に帰ってきてから調べてみたら、月読っていうのはその地域の昔話の中の死の国の神様だってわかったんだってば。特にあの子の一族は月読という神を信仰してたんだってばよ。・・・あの子にとっては、血継限界も、・・・ましてや忍なんて関係なかった。・・・制御できない力があるってだけで・・・」

ぐ、っと唇を？んだ様子に、イタチはあえて問いかけた。

「月読は・・・どんな姿なんだ？」

ナルトは弾かれたように彼を振り返ったが、しばらくしてまた口を開いた。

「髪が黒くて、肌が真っ白で、右頬に模様があるんだってば」

「・・・お前は月読になりきっているというわけか」

「私が初めて殺したあの子のことを忘れないために。・・・やるならところんやらないと」

にしし、と笑ってナルトは立ち上がった。

「私はこの里が大好きなんだってば。だから守りたい。だから暗部になった」

「それが殺しても？」

「その覚悟は忍なら誰でも持たなきゃいけないものだってば」

それを自分はあるの子の時に覚悟した。

「イタチさんは違うの？」

「俺は・・・」

見つめるナルトの顔を白い光が照らした。

月の光とは違う熱いほどの黄金を纏った白い光。

イタチはそれに言葉を切って空を見上げた。夜が明けたのだ。

答えられないでいる自分を彼女は振り返ると、太陽と同じ目映さで笑った。

「もう朝だってばね」

「ああ」

「早く帰って朝ご飯の支度しなきゃなー・・・あう、宿題終わってない・・・。またイルカ先生に怒られる・・・ああ、きっとサスケにはまた馬鹿にされるってば」

思い悩む様子に思わず笑ったイタチは、そこに登場した弟の名に柳眉を潜めた。

「サスケを知っているのか？」

「アカデミーで同じクラスだってばよ。・・・お兄さんの前で悪口は言いたくないけど、あいつ、いつも私に突っかかってきて、馬鹿にするんだってばよ。気に入らないならほっといてほしいのに」
「それは・・・」

イタチは少し考えて、嫌な顔をした。

どこか高飛車な性格の弟は、好き嫌いがそれなりに激しく、嫌いなものには目も向けないだろう。

だが好ましいものにはとことん執着する。

食べるものも好きなものであれば三食それでも平気なタイプだ。

それがナルトに対して突っかかっているとすれば――。

（これは、早々に地盤を固めたほうが良いか）

自分はナルトと出会った。

今回のこの縁をなんとか続けるためにできることをしなければ・・・。

「ナルト、・・・朝ご飯を作るということは、火影様はご在宅か？」

「うん。昨日はあんまり残業せずに帰るって言ってたから」

「そうか。・・・少しお話をしたいのだが、家に伺っても大丈夫だろうか？」

「え？うん、別に良いってばよ」

何か仕事のことがな？とあまりナルトは疑問に思わずにイタチに了承の旨を伝えると、彼はよかったと微笑んだ。その笑みに、ナルトはドキツとした。

（な、なんでこの人こんな綺麗なんだってばよ）

あまり美というものはわからないが、イタチがとても美形だということとはわかる。

弟のサスケも同期うちではとても人気があるしーナルトからするといけ好かないクールなガキだが。

イタチは年上であることもあり、精悍な顔立ちと落ち着いた雰囲気、に敵しそうな印象も受けるが、今のように笑うとがらりと印象が変わる。

とても華やかで、でも男性らしいものも感じて・・・でもなんというか綺麗で・・・とにかくときどきとしてしまう。

（うつ、このときどきはなんなんだってばよー）

家路に着くまで、ナルトは落ち着かない胸元をぎゅっと掴むことと

な
っ
た。

そして、突然の来訪者に四代目が驚きつつも、イタチをナルトの
ペアになることを了承したのは、それから1時間ほどあとのことだ
った。

月を読む2（後書き）

月を読む、これにて完結です。

おつきあいくださいました方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5911z/>

金色の星

2011年12月21日23時45分発行